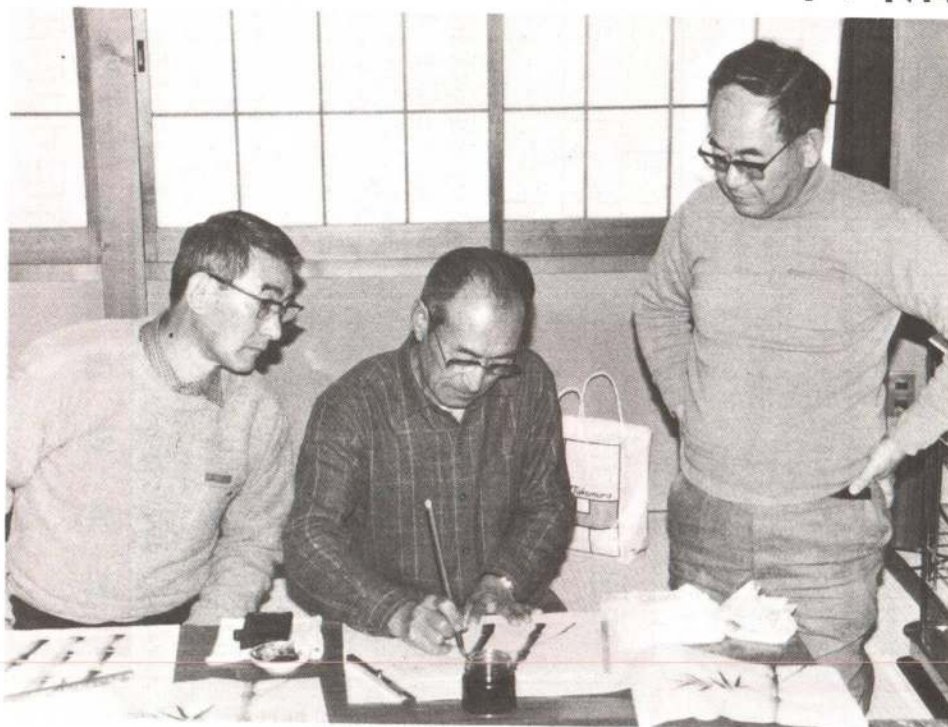


～ 下川沿地区編 ～



マ タ ウ ン ガ イ ド



▲墨の濃淡で描く (墨絵教室)

下川沿公民館では1月から3月まで、隔週土曜日計6回にわたって墨絵教室を開催しています。受講しているのは、主婦、会社員、会社を定年退職された方など8人。「余暇を有意義に過したいので」「友人からいただいた墨絵の年賀状がすばらしかったので、自分も習ってみよう

と思って」など、受講の動機は様々です。

1月23日には第2回目の教室が開かれました。この日の画題は「竹」。墨の濃淡による陰影の出し方やひと筆の勢いで描く竹の伸びやかさ、しなやかさなど、墨絵独特の手法を学びながら、一心に筆をとっていました。

「土蔵があまりにもちらかっていただけで、不要だと思ふようなものを出して、庭で焼いていたんです。このおひつも、焼こうと思つたんですが、『百年以上前の曲げわっぱを探している』という新聞記事があったのを思い出し、焼くのをやめまし

た。このおひつは三十年ほど前まで農作業の際におにぎりを入れて運んだものです。二百年以上もこのおひつが家に伝わっていたのは、工芸品なんかじゃなく、なんでもない日用品だったからでしょうね。」と小林さんは話されます。

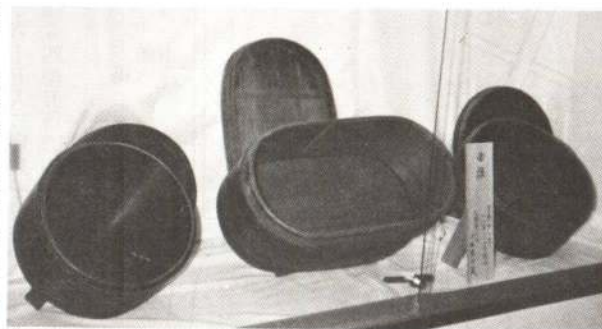
人物登場

225年前の 曲げわっぱを所有

小林重治さん
(川口字長里・71歳)



小林家の歴史は古く、小林さんのお寺の過去帳や系図で調べただけでも貞享四年(一六八四)に死亡した初代重右衛門までさかのぼるとのこと。また六代目の時、「天保のけち」といわれる大きなお米の時に、たくわえていた米を村人に分け与え多くの人命を救ったことなどにより、苗字帯刀を許されています。明治四年には、明治天皇が奥州御巡行のおり、御小憩所に小林家をご利用になられ、十一代目にあたる小林さんは、今でも、その時下賜された白羽二重で作った紋付きや菊の紋章の入ったさかずきなどを保存しています。



▲小林さん所有の曲げわっぱ